

英国詩人アン・ハンターとハイドン：

詩と音楽の贈りもの

— 解説と歌曲の翻訳 —

Haydn's Muse, the English Poet Anne Hunter: Gift Exchange of Poetry and Music, with a Japanese Translation of Their Canzonettas

滝口智子¹

Tomoko Takiguchi

Abstract

Anne Hunter, an English poet active in the late eighteenth to early nineteenth century, offered her poetry to the composer Franz Joseph Haydn, and their collaboration produced nine songs in English. Here I outline how the two artists met and started to work together, with special reference to their gift-exchange of poetry and music. I also translate their nine songs into Japanese.

キーワード：

アン・ハンター ハイドン 英詩人 イギリス歌曲 贈与交換 翻訳詩

Anne Hunter, Haydn, English poet, English Songs, Gift-exchange, Poetry Translation

はじめに

アン・ハンター (Anne Hunter, 1742-1821) は、フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (Franz Joseph Haydn, 1732-1809) の作曲による歌曲に英詩を提供したことで知られる。本稿は、時代背景にも言及しつつ、アンとハイドンの交友と創作過程について概説し、ふたりの共作である九曲の歌曲の翻訳を行う。末尾に参考文献を付した。

1. アン・ハンターとハイドン

1-1. ハイドンの歌曲集『六つの創作カンツォネッタ』 — アンへの献呈

1794年に出版されたハイドンの歌曲集『六つの創作カンツォネッタ』(以降『カンツォネッタ集』と記す)は、「ジョン・ハンター夫人 (Mrs. John Hunter)」に献呈されている。ジョン・ハンター夫人とは、イギリスの著名な外科医・解剖学者 John Hunter (1728-93) の妻、アン・ハンターである。ここに収録された歌曲の詩を書いたのはアンだったが、ハイドンはそれを明らかにせず、その代わりに曲集全体を彼女に捧げた。

ハイドンが詩人の名を伏せた背景には、当時の社会の慣習がある。十八世紀後半のイギリス詩の市場においては、男性詩人よりも女性詩人の作品の方が多く刊行されていた (Grigson, 2009, p.66)。しかし女性詩人の作品は、少数の例外をのぞいて匿名や仮名で発表された。親戚や友人、芸術家が集まるサロン等でのみ作品が流通していたケースも多い。女性が公に活躍するのは慎みに欠けるとの意識から、名を秘する慣行があったのである。作曲家でもあったアンは、『カンツォネッタ集』以前に、アンソロジー、歌曲集、ブロードシートなどで三十以上の詩や歌曲を、匿名で発表していた。その後周囲の勧めもあり、「ジョン・ハンター夫人」という名で『詩集』 (Poems, Hunter 1802) を上梓、六十篇あまりの詩を掲載したのは、『カンツォネッタ集』が世に出た八年後、1802年のことだった。

このような事情から、ハイドンはアンの名を詩人として記せなかったが、詩を提供した彼女への感謝を表すため、献呈という形をとったと考えられる。作品数の多いことで知られるハイドンだが、まとまった形でオリジナルの歌曲を制作したのはこれがほぼ初めてのことだった。アンとの出会いが、彼の音楽に新たなインスピレーションを与えた、あるいはそのきっかけとなった、と言えるだろう。

1-2. アンとハイドンの出会いと別れ

十八世紀から十九世紀にかけて、ロンドンはヨーロッパにおいて屈指の音楽の消費地だった。十八世紀前半はヘンデルもここに居を構えており、世紀後半にかけて、多くの音楽興行主が鎬を削っていた。ヨーロッパにおける音楽の上演は、基本的に、私的な集まりや王宮、また後援者の家での小規模なものに限られていたので、誰でもお金を払えば聴きに行くことができるような、公の上演という意味では、イギリスがコンサート発祥の地であった。

裕福な医者をもつアンは、幼い頃より詩と音楽の才能に恵まれていた。やがて彼女は、父の知り合いだったジョン・ハンターと出会い、結婚する。身の回りには詩人、小説家、歌手など芸術家が多く、レスター・スクエアの自宅でサロンを開催し、幅広く名士らと交流していた²。イギリスで活躍していた興行主のヨハン・ペーター・ザロモン (Johann Peter Salomon, 1745-1815) の招きで、当代一の作曲家とされていたハイ

ドンが渡英した際に、アンがハイドンと知り合ったのも、自然な流れだっただろう。ハイドンの英国滞在は1791-92年と1794-95年の二度にわたった。

具体的にいつどこで、誰の紹介でふたりが出会ったのかは、明らかになっていない。ハイドンは1791年1月にロンドンに到着し、3月から6月までコンサートを行い、自ら作曲した交響曲を指揮した。社交界の注目の的だったそれらのコンサートに、アンも足を運んだことは十分に推測できる。一躍寵児となったハイドンは翌年もコンサートを行い、歌曲に関しては、スコットランドやウェールズの民謡に基づく編曲も行っていった。アンと会ったのはこの頃と考えられる。アンが彼に詩を送ったのかもしれないし、共通の友人を介して知り合ったか、ハイドンがアンのサロンに来た可能性もある。ハイドンがアンの夫ジョン・ハンターに、鼻腔にできたポリープの相談に行ったが、切除手術は断った、という逸話が残っており（Grigson 50）、その折に妻のアンにも会ったかもしれない。いずれにせよ、ハイドンの一度目のロンドン滞在時にふたりは出会い、共同作業で六つの歌曲が生まれた。それが『カンツォネッタ集』である。

ハイドンの一度目の渡英の後、1793年10月、夫のジョンが狭心症の発作で亡くなった。彼は、解剖学関連の標本を蒐集するために、莫大な借金を残していたため、未亡人となったアンは経済的な工面をしつつ、苦勞の人生を送ることになる。1794年、アンは娘アグネスによせて詩を書いている。そこには、娘の結婚を祝福しながらも、彼女と離れることに悲しみを隠せない母の気持ちが込められた³。娘の結婚とほぼ同時期の5月に『カンツォネッタ集』が出版された。ハイドンの二度目の渡英はこの年の2月だった。当時未亡人は夫の死後一年間、公の場に姿を見せることはできなかった。また、二年間は喪服で過ごすことが求められたという。

しかし、1795年4月、ハイドンが、ブラックヒースに転居していたアンの小さな家を訪ねている。喪中の女性は、公然と社交に出かけるのは憚られても、親戚や親しい友人が家に訪ねることは可能だった。この頃アンは、友人の娘イザベラを家に預かっていた。ハイドンは、イザベラに歌のレッスンをする“Mr. Corri”と共にやってきたという⁴。この訪問の際、アンとハイドンが何を話したか、詳細はわからない。『カンツォネッタ集』続編である『第二の六つの創作カンツォネッタ』（1795年刊行。以降、『第二』と記す）の歌詞を選定するための相談が行われたかもしれない（『第二』にはアンの詩による歌曲がひとつ収められた）。「ハイドンが伴奏を試しながら、アンがいくつかを歌い、イザベラがうっとりとして聴いていた」とも想像される⁵。また、『第二』のさらに数年後に出版された、ふたりの共同作品の中でも白眉とされる「妙なる声よ」（“O Tuneful Voice”）および「精霊のうた」（“The Spirit’s Song”）の詩がハイドンに渡されたのも、この折だったかもしれない（Grigson 57）。

「妙なる声よ」は、ふたりの互いへ寄せる思いが生んだ作品と捉えられてきた。つま

り、それは「アンのハイドンへの別れの歌」であり、ハイドンがそれに応えるようにアンへの思いを曲にした、というのである（Grigson 58）⁶。ハイドンがブラックヒースの家を訪問した時、彼はすでに六十代で、みたびの渡英の見込みはうすかったし、事実これが最後のイギリス滞在となった。また、この詩にみえる“Thy accents”（あなたの声／言葉）という詩句は、外国人であるハイドンの“accents”⁷を懐かしむ詩人の気持ちを表すとも受けとれる（原・杉本 2020）。なお、今日残るアンの原稿を参照すると、「妙なる声よ」は、「アン自身が作曲した曲に詩を付した作品としてリストアップ」されており、1802年にアンの作曲で、ザロモン篇の『六つのイギリスのカンツォネッタ』（*Six English Canzonets*）に掲載されている（Grigson 58）。ハイドンによる作曲の刊行は1805年なので、彼は「ザロモン篇の楽譜を見て、そこからアンの歌詞を採った可能性」もある（Grigson 59）。

1-3. 詩と音楽の贈りもの

アンがハイドンに別れの詩を贈り、ハイドンは彼女に歌曲という形で真心を返したのか。私たちは、数々の事実をつなぎあわせて、推測することしかできない。しかし、アンがハイドンに六つの詩を贈り、ハイドンが返礼としてそれらの歌曲（『カンツォネッタ集』）をアンに捧げたこと、そしてふたりが、ハイドンの二度の渡英を通じて、互いにインスピレーションを与えつつ交流を続けたこと — 少なくともこれらは事実であった。夫を亡くし、華やかなサロンの場を失い、ロンドン郊外に静かに暮らしていたアンが、再び詩作と作曲に向き合い、外の世界に出るようになったのは、1795年のハイドンとの再会も大きな役割を果たしていたのではないだろうか。だとすれば、たとえ「妙なる声よ」が贈与交換の証しではなかったとしても、ふたりの間に芸術家同志の、あたたかな心の交感がなかったと断言はできない。アンが、ハイドン晩年のオラトリオ『天地創造』についても、「1803-4年にかけて……その英語版をさらに洗練された英語の詩に書きなおしていた」事実（Grigson 69）からも、彼女の作曲家とその作品に寄せる思いが偲ばれる。

十八世紀から十九世紀にかけて、詩や詩集は親しい人への贈りものでもあった。詩を書く多くの女性たちにとって、本名を公にして詩集を売るよりも、無名であっても詩を贈与することに重きがあったのかもしれない。やがて女性詩人は、職業詩人として文学市場に参加し、経済的な報酬を得ることを模索するようになる。それとともに、贈与と経済的な報酬との狭間で、葛藤し苦悩する詩人もいた⁸。アン・ハンターはハイドンとの再会後、初めて自身の名を明らかにして詩集を出版した。それは評判を呼び、翌年再版され成功を収めた。女性詩人の成立という観点から見たときに、彼女を、贈与としての詩から経済的市場に参入する詩集という大きな流れのなかで、転換点に立ち、

両方に深くかかわった詩人として捉えることもできるだろう。

2. アン・ハンターとハイドンの歌曲、翻訳

『六つの創作カンツォネッタ』(Dr Haydn's VI Original Canzonettas 1794) 全曲

I. The Mermaid's Song⁹ Hob. XXVIa-25

人魚のうた

海の水面(みなも)は碧(みどり)の硝子

陽光(ひかり)の舞をきらきら映す

ついておいでよ

真珠の数多(あまた)輝くところに

さあいきましょう

珊瑚礁ひろがる海を

おいで おいで おいでよ

見にいきましょう宝ものを

揺らめく波のはるかな向こう

深い海の洞窟に かすかに光る

だれも知らない宝ものを

嵐はとおい彼方に

潮の満ちるまえに

おいで おいで おいでよ

II. Recollection Hob. XXVIa-26

追憶

ふたりが初めて出会った季節が

めぐり来たのに あなたはいない

時がとりもどせないものを

忘れることができるなら

美しすぎる はかない日々よ
去ってしまったの 永遠に

思い出に消えゆく一瞬の
喜びの影をもとめて
夢のなかで飛翔をとめて
過去のすべてをとりもどす
目覚めれば 終わりなき悲しみが待つ
はかない幻影を 涙が閉ざす

III. A Pastoral Song XXVIa-27

牧歌

母さんが言うの 薔薇色の
紐であたしの髪を結い
きれいなリボンで袖を留め
青い上着を締めなさい

なぜなの 座って泣いてばかり
みんな踊りに行くのに
だめよ そんな気持ちになれないの
ルビンがないから

愛しい人と過ごした日々は
もう戻らないのね
苔むす石に腰おろし
ひとり ため息つくの

亜麻糸を紡いでうたう
あたしの小さな物語
村は眠って 死んでるみたい
ルビンがないから

IV. Despair Hob. XXVIa-28

絶望

はり裂けそうな心の痛み
誰にも告げずにきたけれど
絶望が苦しみを暴いた
時も希望も 癒せない

悲しみがわたしを墓にいざなうとも
優しいあなた 苦しまないで
死は奴隷を自由にする
だから嘆かないで

死者が静かに眠る地を
さまよう夕べがあれば
憐れみに身をまかせ
涙をあふれるままにして

貴い露の雫がこぼれても
わたしにはもう見えません
哀しい追憶のため息を
聞くこともないので

V. Pleasing Pain Hob. XXVIa-29

甘やかな痛み

波打つ鼓動に疲れ果てた胸から
疑いよ 怖れよ 疾く立ち去れよ
甘やかな痛みにとらわれた日々
二度と戻らぬよう 飛び去れよ

ただ微笑みの時が戻ればいい

悩みを知らぬ空想の 花輪を冠った時が
お伽の国の喜びよ 陽気な願いよ
来たれ 輪をえがき浮かれて踊れ

時よ 楽し気に滑りゆけ
数多の命の荒波を越えて
悲しい後悔に行く手を阻まれず
忘却の穏やかな源へ向かえばいい

VI. Fidelity Hob. XXVIa-30

忠実な愛

風が空ろにごうと唸り
激しい雨が打ちつける
きりきり痛むこの胸は
慰めひとつ見つからない

愛しい人よ あなたを待つのが
どんなに辛い運命か
荒れ狂う嵐か 大波か
そればかりを思うから

気まぐれな運命が糸を紡ぎ
わたしたちの日々を操る
格子の影落ちる暗がり
最後の糸が尽きるまで

ふたりの運命がどうあろうと
わたしの定めは決まっている
生きていても お墓の中でも
この心はあなただけのもの

ハイドン『第二の六つの創作カンツォネッタ』(*Second Set [sic] of Dr Haydn's VI Original Canzonettas 1794*) より

II: The Wanderer Hob.XXVIa-27

さすらい人¹⁰

ひとり彷徨う ほのかな月明かり
揺らめく光が暗闇をつらぬく
梟がねぐらを探し 夜鳥の啼き声が
草地をひたす恐怖を奏でる

来たれ 哀しみの娘よ 幸いな者でなく
痛みが涙に包まれ 安置される地に
過去にさまよい 明日を忘れ
希望も怖れも 何ひとつない処に

ハイドン 「精霊のうた」(*Des Geistes Gesang 1803*)

The Spirit's Song Hob. XXVIa-41

精霊のうた¹¹

お願い 聞いてくださいな
お墓の前で哀しまないで
わたしの魂はあたりを彷徨い
あなたが来るのを待っています

あなたはひとり うち沈み
うずくまり 泣いている
わたしの冷たい亡骸が眠る
墓石の上に項垂れて

瞳が悲しみを語る
涙の雫がこぼれる
ため息が空に溶けてゆく
わたしにはそれがわかるの

お願い 聞いてくださいな
お願い 聞いてくださいな

ハイドン『ピアノ伴奏による歌曲 妙なる声よ』(*O Tuneful Voice. A Song with an Accompaniment for the Piano Forte* 1816) (初版 1805年) 大英図書館アーカイブより

O Tuneful Voice Hob. XXVIa-42

妙なる声よ¹²

妙なる声よ なつかしい
この耳に 届かなくとも
いまも心に響く調べ
木精(こだま)の裡(うち)に暮らしたい
あの日のせつない「さよなら」を
いつも聴いていたいから

明るい瞳よ! その星を
囲んで揺れる 澄んだ炎を
護(まも)る役目につきたい
ヴェスタ¹³に仕える乙女のように
きれいな灯りに 微笑みの糧を
煌めきがけっして朽ちないように

註

¹ 和歌山大学経済学部非常勤講師。

この小文と翻訳を發表するにあたり、アン・ハンターの詩によるハイドンの歌曲についてご教示いただいた原謡子さんと杉本周介さんに心より感謝の意を表す。おふたりは、2018年と2020年に、コンサートにおいてこれらの歌曲を演奏された。

² アンの妹 Elizabeth は「著名な歌手」であり、アンの友人で小説家の「Fanny Burney は音楽学者 Dr. Charles Burney の娘」だった (Grigson, 2009. p. 33)。アン主催の「木曜会」と称されるサロンには、所謂「青踏派」と呼ばれる知的な女性たちも集った。なお、彼女の住まいは夫ジョンの診療所や解剖学関連の施設も併設され、彼の標本コレクションも置かれていたが、アンの社交場とは別々で、入り口が表と裏にわかれていた。ジョンのコレクションはのちに政府が買い取り、現在ハンテリアン博物館に収蔵されている。

³ “To my daughter, on being separated from her on her marriage” (*Poems*, Hunter 1802, p.33). アグネス (Agnes Hunter) は 1794 年 5 月に結婚した (Grigson 186)。

⁴ Mr. Corri とは、イタリア人作曲家・声楽家・出版者・興行主の Domenico Corri (1746-1825) と推測される (Grigson 57)。Corri は『カンツォネッタ集』と続編の『第二』を出版した。

⁵ イザベラは、「あの有名なハイドン博士が 17 日金曜日にやってきました。博士の音楽は魅力的で、本当に、とてもきれいなんです。」と手紙に書き残している (Grigson 57)。

⁶ 具体的に誰がいつこのように考え始めたのかについては、その源を正確に追うことができないためか、Grigson も明記していない。

⁷ *The Shorter Oxford English Dictionary* (third edition, 1983) “accent” の項に 3. The mode of utterance peculiar to an individual, locality, or a nation 1600, 5. poet. A significant tone or sound; a word; *pl.* speech 1595. とある。

⁸ 十九世紀初期からヴィクトリア朝にかけての女性詩人の贈与交換、詩の市場への参入についての考察は、滝口 2007, 2020 を参照されたい。

⁹ これら六編の詩は、アン・ハンター『詩集』(*Poems*, Hunter 1802) にも掲載されているが、タイトルは異なる。『詩集』における掲載頁とタイトルは次のとおりである。「人魚のうた」(104 頁 “A Mermaid’s Song”)、「追憶」(102 頁 “Song”)、「牧歌」(110 頁 “Song”)、「絶望」(105 頁 “Song”)「甘やかな痛み」(94 頁 “Song”)「忠実な愛」(109-10 頁 “Song”) なお、翻訳の原典として上記『詩集』を用い、歌曲の翻訳という観点から、タイトルはハイドンの楽譜に掲載のものを使用した。

¹⁰ 翻訳の原典は 『詩集』(*Poems*, Hunter 1802) 101-2 頁。タイトルは “Song”。

¹¹ ハイドンは 1803 年にこの楽譜をウィーンで出版、1800 年以前にアンが自身で作曲した作品もある (Grigson 122)。翻訳の原典は『詩集』(*Poems*, Hunter 1802) 107-8 頁。

タイトルは“The Spirit’s Song”。

¹² 翻訳の原典は『詩集』(Poems, Hunter 1802) 103頁。タイトルは“Song”。

¹³ Vesta とは、ローマ神話の炉・かまどの女神のこと。

引用・参考文献

Adams, Aileen K. (1995) “‘I am happy in a wife’: A Study of Mrs John Hunter (1742-1821)”.
Annals of The Royal College of Surgeons of England, Spec No: 32-37.

Day - O’Connell, Sarah. (2009) “The Composer, The Surgeon, His Wife and Her poems: Haydn and the Anatomy of the English Canzonetta.” *English-Century Music* 6/1(2009), Cambridge UP, 77-112.

Grigson, Caroline. (2009) *The Life and Poems of Anne Hunter: Haydn’s Tuneful Voice*. With an Introduction by Isobel Armstrong. Liverpool: Liverpool UP.

原謡子、杉本周介 (2020) 『英語詩によるカンツォネッタ集 — アン・ハンター詩 フランツ・ヨーゼフ・ハイドン作曲』 原謡子 ソプラノ、杉本周介 フォルテピアノ、StudioR ムジカロゼッタ企画主催 2020年7月

Haydn, Franz Joseph. (1794) *Dr. Haydn’s VI Original Canzonettas for the Voice with an Accompaniment for the Piano-Forte: Dedicated to Mrs. John Hunter*. London : Printed for the Author, & Sold by him at No.1, Bury Street, St. James - at Messrs. Corri, Dussek & Co. Music Sellers to her Majesty, No. 67 Dean Street, Soho & Bridge Street, Edinburgh. (『六つの創作カンツォネッタ』楽譜)

----- (1816) *O Tuneful Voice: A Song with an Accompaniment for the Piano Forte*. London: Published by Goulding, D’Almaine, Potter & Company. (google books) (「妙なる声よ」楽譜、初版 1805年)

----- (1795) *Second Sett [sic] of Dr. Haydn’s VI Original Canzonettas : for the Voice with an Accompaniment for the Piano Forte. Dedicated to the Right Honble. Lady Charlotte Bertie*. London : London: Printed & Sold for Messrs. Corri, Dussek & Co. (『第二の六つの創作カンツォネッタ』楽譜)

Hunter, Ann. (Mrs. John Hunter) (1802) *Poems*. London. Printed for T. Payne, Mews Gate, by T. Bensley, Bolt Court, Fleet Street.

野中涼 (2010) Book Review. Caroline GRIGSON, ed., *The Life and Poems of Anne Hunter: Haydn’s Tuneful Voice*. 『イギリス・ロマン派研究』第34号 (2010) : 112-115.

Smith, Sir Rodney. (1975) “The Hunters and the arts”. *Annals of the Royal College of Surgeons of England*. 1975 Sep; 57(3): 117-132.

- 滝口智子 (2007) 「交換と死—レティシア・ランドンのロマンス、『金いろの堇』『ロマンティシズム』文学と評論社編 英潮社 63-76 頁
- , (2020) 「ゴブリン・マーケット」の金と銀 — コボルド、ランドン、ロセッティにおける贈与交換の系譜 『文学と評論』第3集第13号 総50号記念号 13-24 頁
- 矢野真知子 (2013) 翻訳 ウェンディ・ムーア 『解剖医ジョン・ハンターの数奇な生涯』河出文庫